郷土室だより

第 23 号
昭和54年3月10日
（平成14年3月31日増刷）
編集・発行
東京都中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地 1-1-1
電 話 3543-9025

切絵図考証 一〇

安藤菊二

○前回で、どうやら薬研堀浜町地区の武家地の解説をほぼ終った。今回から飛んで築地・明石町地区へ移ることとする。木挽町地区も記すべきことがあるけれども、郷土室だより第四号から第五号にかけて記す所があった。重複を避けていきなり築地に移る。

地図は前同様、金鱗堂尾張屋清七版を使用する。

知ってのとおり、築地地区と現在の明石町地区は明暦の大火で生じた焼土をもって埋立造成された土地で、工事完了までに一〇年ほどかかったらしい。

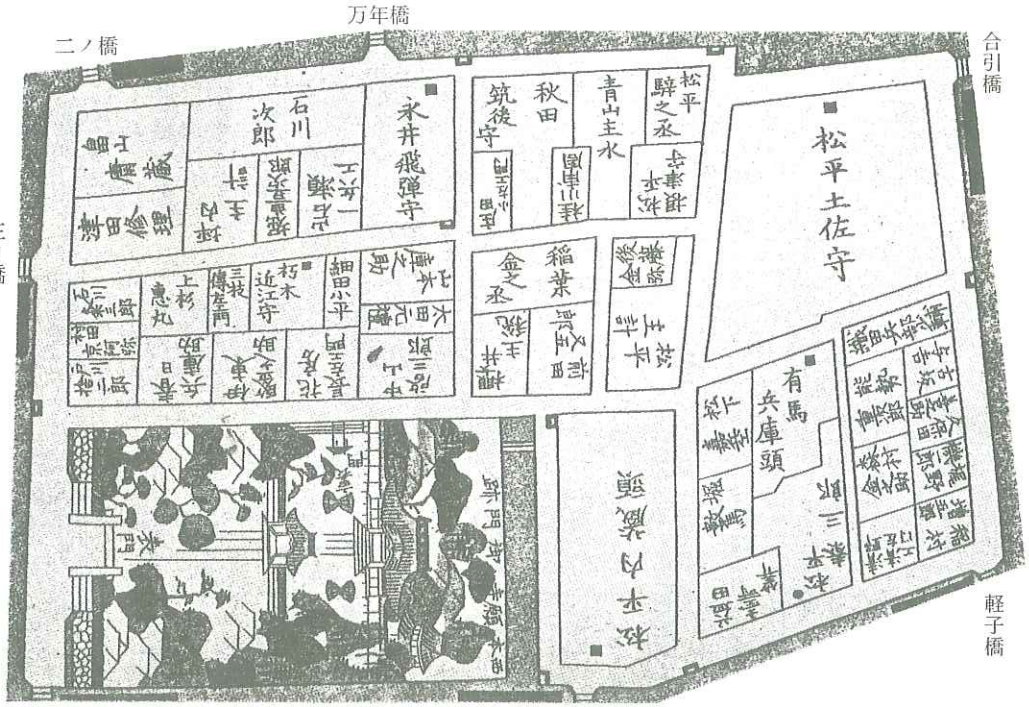
築地一・二・三丁目の一区画は、本願寺東側を除いて、河岸地を全部歩道にしたのは、従来の埋立地に見られぬ新しい考案だった。

築地地区の埋立完成の時点で、寛文一一年版江戸図が上梓されたものと思う。寛文から幕末で、一気に飛ばして切絵図に移る。

第13 旧築地一丁目

○松平土佐守

土佐高知城主山内家（二四万五千石）の中屋敷。文政九年（一八二六）三月拝領。逐次隣接の邸地を加えて拡張された。東京市史稿、市街篇三六巻などから屋敷受渡の記録を拾ってみると、



文久元年　尾張屋版切絵図……築地地区の武家屋敷

文政九戌年三月二日
本多豊後守拝領中屋敷
木挽町築地弐千拾五坪　松平土佐守江
（三六四頁）

文政九年五月六日
安藤筑後守拝領屋敷
木挽町築地四百坪　松平土佐守え
（三六七頁）

文政九年十二月十日
岡部因幡守拝領屋敷
木挽町築地千四百四拾五坪余　松平土佐守え
（四六〇頁）

文政十三寅年、松平土佐守屋敷間東西之道敷同人屋敷之添地ニ囲込、一屋敷ニ成。（『御府内沿革図書』）

また、屋敷渡絵図註文（市街篇三七―二六〇頁）に、「文政十三年八月廿五日、鉄砲洲松平土佐守屋敷御差加地所坪数三百拾六坪余」とあるから、邸地の坪数は総計四、〇七六坪ほどあったわけである。現在の築地一丁目一から六番地、同二丁目一・六・七・八・九番地を包括する広さで、中央区役所も、築地警察署もその旧邸跡地内にある。

○織田兵部少輔

「安政六年十二月廿八日、松平右京亮下屋敷、八丁堀築地六百五十坪、織田兵部少輔え」（『相対替屋敷書抜』）

○古坂与吉

「御鉄砲玉薬奉行、古坂与吉、百俵」（『文政二年武鑑』）「古坂与七郎、百俵、木挽丁原、御膳奉行」（『天保九年武鑑』）

○久保田善之助（未考）

○梶野機一郎

「御台所御用人、両御番格御庭番、二百俵高、梶野機一郎、つきじかるこ橋」（『天保九年武鑑』）

○稲村増五郎

『聞之任續篇』安政元年六月の条に「○今月歟、稲村三羽没。西丸御膳所組頭。稱増五郎。号松園又無言。住築地軽子橋」とある。幕臣で、和歌か俳諧の嗜（たしなみ）のあった人であるらしい。

○清野清左衛門（未考）

○森村金之助

安政六年武鑑に「天障院様□番衆、森村金之丞、つきじかるこばし」とあるのは、この人か。

○能勢重次郎（未考）

○有馬兵庫頭

在所、下野都賀郡吹上、一万石、中屋敷鉄砲洲つきじ（『安政六年武鑑』）弘化三年六月九日相対替によって拝領したことが、市史稿市街篇四一―八一〇頁に見える。

○松平泰三郎（未考）

○益田寿算

嘉永六年近吾堂版切絵図には益田寿庵と記されている。寿庵が正しい。『相対替屋敷書抜』文政十一年十二月廿八日の条に

矢田堀理兵衛拝領屋敷、鉄砲洲弐百九十五坪、小普請組神尾豊後守支配増田寿庵え」と記録されている。（市街篇三六―七八六頁）

○堀数馬

『相対替屋敷書抜』に、

寅。天保十三年十月三日
堀数馬拝領屋敷鉄砲洲築地
七百五拾坪　水野越前守。忠邦。え
（一件省略）
寄合松平侶之介拝領屋敷、木挽町築地、千三百拾六坪余、堀数馬え。

とある。（市街篇四〇―一四二頁）

○松下嘉兵衛

「御老中支配、御寄合衆、三千石、木挽町つきじ」（『天保九年武鑑』）「御目附御番方、三千石、木挽町つきじ」（『文久二年武鑑』）

第14　旧築地二丁目

○松平駿（すい）之丞（未考）

○松平摂津守

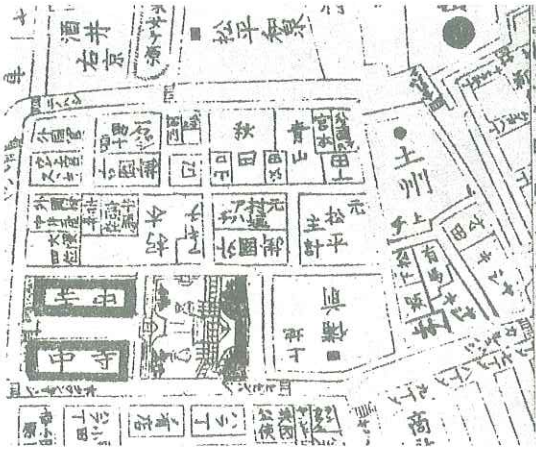
「在所、上州小幡二万石。帝鑑間詰、上屋敷はま丁、中屋敷つきじ、下屋敷内藤新宿」（『一一武鑑』）

○青山主水

「御寄合衆、五千石。（『安政元年武鑑』）中川御番衆、五千石、つきじ、馬」（『文久二年武鑑』）

○桂川甫周

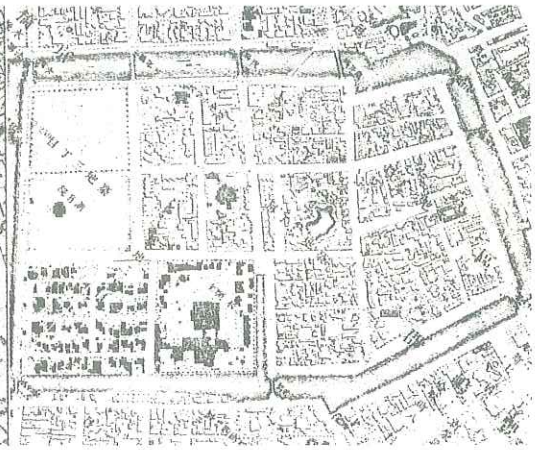
蘭法外科の奥医師桂川家七代目の甫周国興である。桂川家は初代甫筑邦教（みち）以来、二代甫筑国華、三代甫三国訓（のり）、四代甫周国瑞（あきら）、五代甫筑国宝（とみ）、六代甫賢国寧（やす）、七代甫周国興と次ぎ、代々ここ築地に住み、法眼の位を授けられ声望甚だ高かった。法眼は外科の奥医師の主席に付与される位であって、登城には長柄の駕籠に乗り、かごかきの陸尺四人、駕脇侍二人、薬持一人、傘持、挟箱持、袋杖持、草履取などすべて、



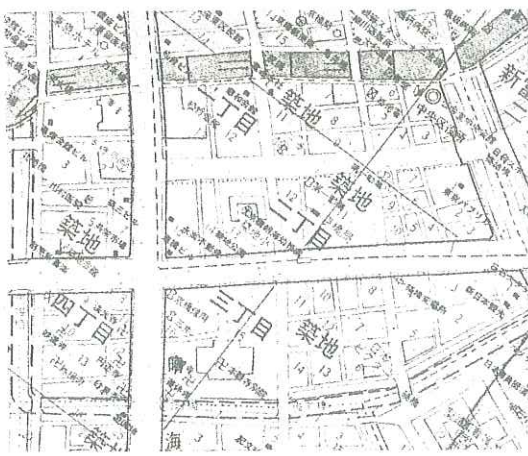
② 明治２年 東京大絵図

① 嘉永６年 近吾堂版切絵図（部分）

④ 明治44年 逓信管理局図



③ 明治20年 参謀本部測量局図



⑥ 昭和46年 都市計画街路図

⑤ 昭和５年 東京市復興局図

十一人の供を従える。旗本なども行き合う時は路を譲らされるほど幅を利かせたものであったという。（今泉みね『名どりの夢』三〇四頁）

甫周国興は、甫賢の長子として、文政九年に生れた。通称は初め甫安、のち甫周と改め月池と号した。若冠二十一才にして御奥医師となり、次いで法眼に叙された。けだし破格の抜擢であった。

桂川家の宅趾については、今泉源吉氏（蘭学の家「桂川の人々」三巻の著者）が、今泉みね刀自の追憶談『名残の夢』（昭和一六年、長崎書店刊）の巻尾に添えられた参考記事の中で「以前の築地中通（木挽町梅小路）の邸は三百坪位の手狭な拝領屋敷なるが、初代（少くとも享保頃）より代々引続き住居せし所なり。（今の電車通りに面せる築地二丁目六番地の三菱銀行京橋支店と割烹平田は其邸跡に建つ。）云々」と書いておられる。（同書、三一一頁）

区の教育委員会で桂川甫周の旧宅趾を史蹟として調査する際に、尾張屋版の切絵図と、この今泉氏の記述に順拠して場所を推定したのであるが、これには異説もあろう。

というのは、嘉永六年刊近吾堂版切絵図（三頁、地図①参照）桂川甫周の名を岩瀬一兵ェの南隣に記しているのであって、その位置は地図の上での推定では、現在の京橋郵便局の辺に該当するように見受けられる。どちらが正しいのか、なお今後の調査を必要とすることを、この機会に記しておく。

○秋田筑後守

「中奥御小性衆、五千石」（『安政六年武鑑』）

○庄司小左衛門

「右大将様御附衆、御徒歩頭、父乙次郎、二千六百石、つきじ門跡脇」（『天保九年武鑑』）

○後藤金弥（未考）

○松平主計

「御鉄砲百人衆之頭、根来組二番。松平主計頭、五千石、つきじ門跡脇、馬」（『文政二年袖珍武鑑』）

○稲葉金之丞

「御寄合衆、父遠江守、五千石、つきじ門跡脇」（『天保九年武鑑』）

○桜井主税

「御書院番斎藤内蔵頭組、千四十三坪余、弘化三年二月四日拝領」

○前田又五郎

御先手鉄砲頭。二千五百石、（『天保九年武鑑』）「御寄合衆、前田又五郎、二千五百石、本郷からかさ谷、つきじ門跡脇」（『文久二年武鑑』）

この邸地拝領の記録は、東京市史稿四一―七五一頁に載っている。すなわち次に示すごとくである。

「築地門跡裏門前、寄合前田又五郎屋舗、坪数千四拾三坪余 内、建家、長屋、土蔵共、弐百六十壱坪余

東、道。西、寄合稲葉金之丞。

南、同人。御書院番斎藤内蔵頭組桜井主税。北、道。

東弐十五間四尺　西弐十六間

南四十間三尺　北四十間弐尺

湯島五丁目裏前田又五郎屋敷類焼之儘差上、築地門跡裏門前竹本主水正様御上ケ屋敷千四拾三坪余、家作共又五郎拝領仕候ニ付、被成御渡、御絵図之面、御定杭之通、相違無御座奉請取候。（云々）

弘化三午年二月四日

（省略）　寄合前田又五郎内

内林団右衛門印

築地門跡裏門前竹本主水正様御上ケ屋敷、建具畳目録

一門扉 但潜共、錠鍵付　大小六枚

一戸 但舞良戸、杉戸、半戸共　弐百四本

一障子 但半障子共　百三拾五本

一襖 但半襖共　四十七本

一畳 但半畳共　弐百三十八畳

一植木　大小品々

一庭石　大小品々

右之通り相違無御座奉請取候以上。

午。弘化三年二月四日

寄合前田又五郎内

内林団右ェ門印

屋敷境目立合、寄合稲田金之丞内（隣家立合）　桑原紋右ェ門

御書院番斎藤内蔵頭組

桜井主税内

寺西武右ェ門

―屋舗預絵図証文―

（市街篇四一―七四六～八頁）

○松平内蔵頭

備前岡山（三一万二千五百石）の城主池田慶政である。大広間詰、従四位少将、嘉永七寅年二月任、天保十三寅六月家督を継ぐ。菩堤寺は芝の仏日山東禅寺であった。

中屋敷で、表門は尾張屋版では築地川に面しているが、近吾堂版では、南面して本願寺側にあるように記してある。本願寺北側の堀は幅八間、本願寺が管理していたようである。

門前から南小田原町方面に渡る橋に備前橋の称があるのは、備前池田家一手持の橋だったからであろう。橋の近くに上水の吐口があるので、水舟が来

ては水を汲んでいた。石川島南の人足寄場の水舟も、赤鬼青鬼が乗ってここまで水を汲みに来たそうである。

本邸については『江戸藩邸沿革』に次の記載がある。

岡山藩　侯爵　池田家　旧封三拾壱万五千弐百石

一、中屋敷　築地　京橋区築地二丁目

相対替宝永元年十月廿一日、切坪上地享保六年正月廿六日、相対替囲込明和五年十一月五日、相対替囲込、天保十四年三月十七日、坪数五千三百坪余。

備藩邸考、初此地ハ新庄候戸沢家ノ上屋敷ナリシヲ、宝永元年我土器町ノ邸ト交易ノ事御願アリ、十月廿一日御許シ有リ、同十二月十三日戸沢家ヨリ受取ラル、五千三百余坪ナリ。

享保六年正月廿六日、右之内三千坪上地ヲ被レ命云々。明和五年六月邸地狭隘ナレバ西北隣日向半兵衛ノ屋敷千坪ト、本所邸ノ半ト交易アリ、是日向ノ屋敷ハ我邸ノ上ケ地三千坪ノ内也。（下略）

（市街篇四九―四五二～三頁）

第15　旧築地三丁目

○永井飛弾守

摂津国高槻城主。旧領三万六千石。『藩邸沿革』高槻藩永井家の条に、

一、中屋敷　鉄砲洲築地

相対替屋敷書抜、文化五年閏六月廿九日神尾市左衛門拝領屋敷、鉄砲洲築地二千一五坪永井日向守え。同人中屋敷霞ケ関千四百廿八坪岡部美濃守え。

一、中屋敷　木挽町築地

相対替屋敷書抜、天保十三年十二月廿八日木下図書助拝領屋敷木挽町築地二百坪、上杉豊三郎拝領屋敷同所六百坪永井遠江守え。遠江守下屋敷代々木四千八百廿一坪之内三百坪仙石讃岐守え。遠江守中屋敷本所新大橋千二百十四坪、木下図書助え。七方相対替。

同書、弘化二年十二月廿八日依田隆之助拝領屋敷木挽町築地六百廿坪余永井遠江守え。但中屋敷地続ニ付囲込。遠江守下屋敷代々木四千五百廿一坪余之内二百坪三河口賢一郎え。四方相対替。

と見える。中屋敷が鉄砲洲築地と木挽町築地にあり、どれが切絵図に記された永井飛弾守の邸地に相当するのか疑問だが、参考までに掲げておく。

○石川次郎

「御寄合衆　四千石。（『安政六年武鑑』）

○岩瀬一兵エ

御先手弓頭　八百石

。父市兵衛、御作事奉行、岩瀬肥後守、三百表、つきじ中通（『安政六年武鑑』）

○永井荷風の『断腸亭日記巻十八』昭和九年正月元旦の条に

「晴れて風なし。…午後雑司ケ谷墓地に抵り先考の墓を拝す。墓畔の蠟梅古幹既に枯れ、若枝あまを根より生じたれば今は花無し。先考の墓と相対して幕臣岩瀬鴎所の墓あり。刻する所の文左の如し。」

として、㈠岩瀬氏奕世之墓、㈡淡順院殿正日寧大居士、淡順岩瀬君墓表の碑文を録している。

㈡の淡順院殿が切絵図に記された一兵エであることは、右の墓表に

…君諱忠正、岩瀬氏、称市兵衛。考市兵衛諱忠福第二子、母石津氏、文化九年承レ家、十二年為二書院番士一、嘉永五年為書院番組頭、叙布衣、安政三年転二先手一、以二文久元年九月廿八日一卒。距生寛政六年十一月十一日、享年六十有八、諡日淡順、葬於小石川蓮華寺、室神尾氏女、有六男九女、男皆夭、長女配義子忠震、先殉、一女適榊原政陳、余皆夭。

とあるので知られる。穴人の男子は皆早逝し、九女あった内二女だけが辛うじて成長したのである。その長女の婿となった人が、徒頭目附を歴、擢んでられて外国奉行となった岩瀬忠震、鴎所であった。忠震は従五位下肥後守に任ぜられたが文久元年七月十一日病んで卒した。享年四十有四、三男六女があったが男子は皆早逝し、一族の忠升を入れて家を継がせたが、この人に子無く、岩瀬氏は竟に絶えた。

歴世の墳墓は小石川の蓮華寺にあったのであるが、たまたま市区改正で墓域が毀たれることになり、親籍の本山漸が知友と謀って明治四十二年十一月雑司ケ谷に改葬したのである。

○堀豊次郎（未考）

○堀内主計

「御進物番、つきじ中通。（『文久二年武鑑』）

○畠山庸蔵

「源義勇。表高家衆、三千百石ヨ。（『安政六年武鑑』）

○津田修理

「御寄合衆、三千石、木挽町つきじ（『天保九年武鑑』）御寄合衆、父弾正、三千石、木挽町つきじ。（『安政六年武鑑』）

○山本庫之助（未考）

○細田小平（未考）

○朽木近江守

丹波、福知山藩、朽木近江守為綱。三万二千石。

「朽木氏は近江の旧族にして佐々木の支族なり。弥五郎種綱を以て中興の祖となす。元和四年徳川氏に仕へ禄千石を食む。漸次加賜されて候籍に入り若年寄に補す。野州鹿沼城、常州土浦城を経て、丹波福知山城に移封し、子孫世襲して為綱に至る。明治二年六月福知山藩知事に任ぜらる。」（『列藩要鑑』）

○三枝伝左衛門（未考）

○上杉恵丸

「上杉左近藤原義達、千四百九十六石ヨ、木挽丁つきじ」（『天保九年武鑑』）「表御高家衆、千四百九十六石」（『安政六年武鑑』）

○石川粂三郎（未考）

○村田京阿彌

「御同朋衆、二百俵」（『安政六年武鑑』）

○戸川捨二郎

「御寄合衆、五千石、つきじ門跡わき。（『安政六年武鑑』）

明治初年――築地梁山泊時代
（前列左より井上馨、大隈重信、伊藤博文）
（「人間大隈重信」より）

按ずるに、明治初年に大隈重信の邸地となり、築地の梁山泊の称を得たのは、この戸川家の邸地と思われる。参謀本部測量局図によると、村田京阿弥の邸地跡の辺りに明治十三年「訓盲院」が設置されたもののごとくである。

○大隈候の築地の屋敷については、『大隈候八十五年史』に詳記する所がある。やや長文にわたるが築地地区の重要な資料であるから繁をいとわずにこれを掲げる。

（明治二年）五月中旬、築地西本願寺脇に、約五千坪の地を有する一邸を官から賜はり、十五日営繕司に達して至急修理を了り、下旬そこに移った。この家はそれ迄外国官庁となって居たが、元三千石の旗本戸川安宅の屋敷で、建築宏壮、多く食客を養ふ事が出来た。濶達な君は細節に拘らないで、士を愛して快く門戸を開放したので、当年志を抱き気を負ふ志士は、競うて君の門に集り、その中には薩長藩士を始め、幕臣もるた。秋田の青年や、大和十津川の郷士もゐた。医者も坊主も神主も、各種各様の人物が雑然として、共に大きな竈で飯を焚いて食卓を囲み、玄関から続く各室に占拠して菰樽の口を開き、酣酔して放談高論、盛に長覚の気を吐いたのである。それが後年迄長く築地の梁山泊の名で知られた場所である。

当時井上馨、中井弘蔵、五代友厚、伊藤博文などが君と親近して伊藤及び井上は君の近隣に住み、伊藤の如きは旦暮に寝衣の儘、裏木戸を排して自由に君の家に出入し、共に世務を談じ、議論を上下した。そしてその中から政治上諸種の改革案が生れ君はいつも大抵陳頭に立って、それを廟議に提言した。尚ほ君の築地の家は後に佐野常民が住み、現今はある一富商の住居となってゐる。（『大隈侯八十五年史』二六一頁、大正一五刊）

・受贈図書

。築地小劇場記念碑建設委員会
　築地小劇場関係図書　八十二冊
。日本東洋医学会
　醫界之鉄椎・光琳名画譜等
　四十八冊

◇東京を語る会　第26回

日時　三月十日（土）
　午後一時三十分～午後三時
内容　文芸評論家
　巌谷大四先生を囲んで座談会
　銀座その三「銀座と文学者たち」